

句  
遊

第九集

平成二十一年三月

## 序に代えて

向井眉山

前回第八集の発行から瞬く間に二年が経ち今日ここに『句遊』第九集を皆様のお手元にお届けすることになりました。

二年間に作りました珠玉ともいえる会員夫々の秀句七十二句、其の中から自選により一人十八句を記載したものです。一句一句それぞれに想い出があります。嬉しかったこと、悲しかったこと、花鳥風月の機微、それを如何に表現するかに悩み、一方そのことが経験となり進歩となつて作品に現れているように思われます。

俳人久保田万太郎の主張する「俳句又イトリ説」の中で、俳句は又イトリのようなものでなければならぬと言っております。又イトリとは今様に言えば刺繍のこと、又イトリは数限りない刺繍糸を縦横無尽に交錯して織られており、裏側はなにを表そうとしているのか全く分からないけれども、表を見れば一目瞭然、そこには美しい花があり、風景があり、自然が表現されています。俳句はそのようなものでなければならぬとする主張なのです。

俳句は十七音に託す省略の文学です。喜怒哀楽を

表現する文学で、表ではさりげないようであるもののその裏、その裏にある作者の想いを無限に感じさせる文学です。俳句の面白さ、難しさ、底知れぬ深さが此処にあるように思います。

又イトリ説の説くところ誠に云い得て妙であります。

句遊会は句会を中心に和気藹々のうちに俳句を作って遊ぶ集まりであり、又イトリ説とは一見無縁のように思われるが、さにあらず、楽しく、作っているうちに知らず知らずにその本質に近づき、面白さが増してくるのではないでしょうか。

監査懇話会の会員会友の皆さんでこの句集を読まれた方、一度句遊会に遊びに来ていただき一緒に遊んでみませんか。お誘いする次第です。

(付 記)

平成十九年、二十年度句遊会の活動状況

月例会：平成二十一年三月が第二八回

写友会、画友会との合同出品：平成十九年八月

同 平成二十年十二月

吟行句会：平成十九年 四月 飛鳥山公園

平成十九年十一月 浅草寺界隈

平成二十年 四月 旧芝離宮恩賜庭園

平成二十年 十月 道志温泉一泊

目次

河豚提灯	山の湯	七変化	残生の歩	マイナスイオン	春着	気	明の春	道の租神	残り虫と孫のことなど	冬の虹	旅立ち	晩晴
六川里風	森邦彦	向井眉山	宮川至剛	宮川弘道	生江沢広雄	中山知祐	中路素童	清家静楓	眞田宗興	佐藤政百	勝田冬川	石野喜粹
……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……
三〇	二八	二六	二四	二二	二〇	一八	一六	一四	一二	一〇	八	六

作

品

五

晩 晴

石 野 喜 粹

春の雪能楽堂の余韻かな

花衣着たる王子の狐かな

色白の花はおぼこなうばざくら

名にしおふ芝は江戸つ子えどざくら

遅櫻晩晴念ず喜寿の日日

舟唄や酒に目刺しもあれば良い

ゴンドラの唄ぶらんこを漕ぎながら

異邦人薄暑の宵の六本木

須磨の浦笛の空音か青嵐

炎天下地下を行き交ふ副都心

焼跡に動員の汗コッペパン

身の程の終の住処や蝸牛

明け易し深夜ラジオを聴きながら

笠の内襟足そよぐ風の盆

渡り鳥大地も海もボーダーレス

小春日を旅人になる老夫婦

この道の果てに父祖の地冬の山

分校の古りしオルガン春を待つ

独り善がりの俳号

石野喜粹

一 昨年の春、喜寿を迎え、出来るだけ永く俳句を続けたいと、喜寿の喜、米寿の米、卒寿の卒を合わせて「喜粹」の名を考えた。

果たして九十の先達にあやかるのは夢か。

旅 立 ち

八

勝 田 冬 川

金髪にピアス光りて破魔矢持ち

静けさや春雷やみて夜半の床

今盛り亡母育てし木瓜の花

卒業式入社式よりおそくなり

嫁ぐ子と共に育てし桐の花

青嵐遠くの駅の放送聞き

山頂でビール片手に天下取り

夕立やこの世の垢も流し去り



小夜更けてしばし惚れ聞く虫の声

玉蜀黍夕餉の膳にそつとのり

原油高自動車走らす玉蜀黍

墓参り守れぬ誓ひ繰り返し

冬の海満天の星船の旅

刎頸の友と別れぬ冬紅葉

山頂の日の出に燃ゆる冬の山

蠟梅に亡母の香り偲びけり

妻共にかなはぬ願ひ酉の市

泰然として連山の眠りをり

冬の虹

一〇

佐藤政百

七種をきざむ男の合せ唄

竹刀撃つ気合と気合冴返る

風紋の流れ光りて春立ちぬ

安房丘陵九十九里へと夕霞

戯れて花びらを背に群れの鯉

白牡丹崩れるやうに散りにけり

緑陰やあせらずゆっくりあるがまま

まほろばの雨の大和や蝸牛

苔の香の鮎や白磁の皿の上

夕端居猫三匹と語り合ふ

菜園に打ち込む鍬の力汗

月ゆれて己がこころの定まらず

微笑みの野仏仰ぐや曼珠沙華

紅葉初む道志七里の昼の月

紅葉散る踏み行く道の乾き音

賑はひの灯は空に抜け酉の市

リニアカー眠れる山を突き抜けり

ゴルフ球舞ふ大空に冬の虹

残り虫と孫のことなど

眞田宗興

あつち行けと孫のさす指春の風

近付けばさ程でもなし春の坂

ともに摘みしよもぎ又生ふ母来たれ

切り売りす旧家の庭の蟬しぐれ

孫が来て孫が帰って夏去りぬ

秋風や用無き街を歩きをり

携帯をたたんで見てる秋の空

老いてなほ何故に働く残り虫

漬け物と秋刀魚でちよいと妻の留守

どんぐりを何の用とて持ち帰り

菊坂といへば一葉しぐるるや

携帯に紅葉ひとひら恋が散る

紅葉手が紅葉をしつかと握りしめ

初雪や東京の街江戸の町

寒月やもんじゃ焼屋のにほひして

遠き日の街角似たり雪降りて

われ程の古きカバンや年越しぬ

ゆく年や女房の顔俺の顔

道 祖 神

清 家 静 楓

列車待つ温泉駅の余寒かな

春雷や母の肩もむ手を休め

春宵やヴィトングッチの銀ブラへ

それぞれの想ひを胸に花見かな

桐の花貧しき村へ嫁ぐ姉

消えかかり点りては消ゆ螢かな

蝸牛片目のジャックか勘助か

流灯や大海原へ届けかし

眼下なる豊後水道墓参り

敬老日ナース一座の笑ひ芸

秋晴れや疏水の中の空までも

流れ星地球の裏は朝だろう

菊供花道志七里の道祖神

羽広げ菊大輪の孔雀かな

裏店のお命頂戴ふぐ料理

一日中厨にこもる妻の除夜

減反の農家の納屋の長つらら

舫ひ綱解けば流るる雪の風

明の春

一六

中路素童

喜寿と古稀共に迎へて明の春

野の幸を七草粥に授かりて

西行を思ひつ花の形見かな

寂聴の恋まんだらや春の夜

桐の花峠にかかる路線バス

ででむしの辿り辿りて芭蕉句碑

夏至の雨舫ひしままの舟溜り

大南風耳の奥まで海の音

片蔭にのれん小揺れの京小路



流灯を沖に迎へる海の神

古書店に残る暑さの匂ひかな

星飛ぶや北方領土眼開に

恙なく妻と晩酌敬老日

ふれあひの人情深川秋祭り

落ちしまま大地に還る虚栗

地の店も薪積上げて冬支度

白川郷軒の垂氷も大家族

老兵の白帽目深暦売る

第一集を発刊したのが平成五年。平成二十三年が第十集となります。節目の記念号として発行したいと思っておりますので皆様のご協力をお願いします。

気

一八

中山知祐

立春や卵立てよと競争す

籠もり居て晴耕恨む花粉症

文集の決意それぞれ卒業す

桐の花娘の箏箏にと親の夢

茫茫と武蔵野駆ける青嵐

深緑木洩れ日まだら森の道

蝸牛のんびりゆったり休んだり

竹製の団扇なつかし石油危機

雑草園梅雨のひぬまの花ざかり

線路沿ひ昼顔だけの昼下がりに

流星幼き時の空に消え

こほろぎの鳴く音なつかし母思ふ

ひとやすみ家族で囲むふかし芋

川面走る光の帯の秋入日

空静か枝にまばらな冬紅葉

着ぶくれでブランド悲し山手線

形よき霜柱ふむ靴のあと

地下鉄のぬくもりうれし寒の入り

春  
着

生江沢 広雄

挨拶も大人になりし春着かな

真白にぞ落花積りし飛鳥山

初螢静寂の闇の深さかな

冷奴浮世の憂さを忘れけり

廃屋に主人顔する蝸牛

大南風浜に風紋残しけり

紫陽花や夢幻の世界雨煙る

白扇の波頭立つ幕間かな

埃立つ片蔭もなき遍路道

灯をともし千の風立つ切子かな

骨もなし戦死の父の墓洗ふ

砂浜の小貝散りばむ天の川

皮むけば玉蜀黍の愚直かな

秋灯や夫婦語らず読書せり

秋風や雷神守る大提灯

夕暮の日を集めをり冬紅葉

河豚刺身貼りつく皿の菊模様

雪だるま一筋の道造りをり

マイナスイオン

宮川弘道

七種や土間の奥より匂ひける

枝はねて梅の香散らす雀かな

うらかなや婚の曾孫に和を願ふ

旅人となりたる春の夜の地酒

貝殖ゑし人造浜の薄暑かな

新緑の雨にけぶれる深大寺

ぼうたんや夕べ琴の音おとろへず

バラ挿してあの世の亡妻に嗅がせけり

滝しぶきマイナスイオンに浸る脳

亡き妻の声また夢や明易し

短夜や笹の葉先に露とめて

樨大樹夕立白く近づきて

主婦ひとり子供背負ひて夏料理

南風荒るる足摺灯台絶壁に

片蔭といふものなしサッカー場

夏の海発電風車立ち並ぶ

高所より小鳥とびくる金閣寺

毒で死す世のなつかしきふぐと汁

残生の歩

二四

宮川至剛

願ふより謝す脇宮の初参り

下萌に残生の歩を確かめし

露の臺揚げしころものうすみどり

名なき山重なり秩父薄霞

嘴に喜色集めし雀の子

衣更へてまつさらな風ふところに

矜持とはかくある姿羽抜け軍鶏

水の色水の香こぼし苞の鮎



片陰の尽きず馬籠の宿の道

カンナ燃ゆ静もる白亜司祭館

かへりみしながき昭和や西瓜切る

眼窩なき蠓螂の顔さびしかり

満月をかけて 1 キヤッツ 2 の芝居小屋

海翔けて今天空に鳥渡る

賜ばりしは空の匂ひや秋の晴

木の葉髪なほむらぎものたぎりあり

凧や天狼星光ゆるがせず

吉原の大火遙けき女郎塚

七 変 化

二六

向 井 眉 山

装いの妻輝きし春着かな

母の背に破魔矢はなさず小さき掌

酒一合二合三合めざし焼く

雪柳ゆれて真白き風残す

喜びを証書に巻きて卒業す

バリトンもテノールもあり猫の恋

日傘ゆく路地もまた坂神楽坂

瀬の音を遠く近くに夏料理

緑陰に熟睡せし子や乳母車

六方踏む団十郎や七変化

我も又渡り鳥なり波枕

今朝の秋一步に一句生まれそう

せせらぎのせせらぎ呼びて芒原

星ひとつ飛びて残りし山の黙

風に舞ひ舞ひて阿修羅の散紅葉

江戸っ子になりしひととき酉の市

飽きもせず聴きいる「第九」十二月

凍返る午前零時の大時計

今年で俳句を始めて七年目に入りました。まだまだ俳句とは名ばかりで、未熟さを痛感しています。千里の道も一歩からとか、じっくり、あせらず、やっけていく積もりです。ご叱正、ご教示をよろしくお願い致します。

山の湯

森 邦彦

今年こそ思ひを包む春着かな

春雷に越後の蕾も目を覚まし

要には雪見灯籠春の池

石柱に枝をあづけて桜満つ

川掃除蚩育てと祈りつつ

日は西に一風呂浴びて夏料理

山抜けて湖面に刺さる大夕立

汗知らず職場なつかし退職後

母逝きて敬老の日の遠くなり

竹生島魚獲り群れる渡り鳥

黒姫の焦げ目香ばし焼きもろこし

菊と仁王これが日本だ浅草寺

山の田の稲木に当たる夕日かな

山際に秋の日残る道志の湯

熊手もて福のみ手繰り寄せるかな

新しき命育み山眠る

大氷柱田圃の果ては妙高へ

もの足りぬ会社離れの十二月

会社離れに何か新しいことをと思い、句遊会のお世話になり、一年半が過ぎました。高校生の頃、受験勉強の気分転換に行った落柿舎で、「柿主や梢は近き嵐山」の句に出会い、絵のようで面白そうだと感じた記憶がある。見たもの、感じたことを素直に写し取ってみたいと思う。

河豚提灯

六川里風

長袂パスモをかざす春着の娘

立春やこころの野山光り初む

春雷や夢の記憶のちぐはぐに

短夜をさらに短かく目覚めけり

明滅の息づかひあり恋蚩

青嵐高原の馬嘶けり

庭よりの風も一品夏料理

散ることを拒み朽ちゆく七変化

朝顔や何処に匍はせむ遊び蔓

大日向葵直射日光のみ込めり

出でてまた片蔭ひろふ妻に添ふ

悠久の時のひとこま星流る

律義にも鳴きつくさむと法師蟬

けなげにも鎌かまへをる小螳螂

秋闌けて雄滝雌滝のせめぎあひ

雷門色なき風をくぐり抜け

河豚提灯うつし世のさま睨みをり

ジグザグにみしみしと踏む初氷

## あとがき

『句遊』第九集をお届けします。

本集への出品は十二名、前集と同じですが、新会員が二名出品されました。また、宮川弘道氏はご養生のため、編集委員が作品を選び載せておきました。なお、誠に残念なことですが、創刊以来の常連であった、林和正氏が昨年逝去されました。

茲に改めてご冥福をお祈りします。

編集に当り、出品は従来同様、自選十八句とし、前書き、ルビは原則として付けておりません。また、前集から、作品のあとの余白を使い、自由に短文を書いていたこととしました。

次集は平成二十三年、いよいよ第十集となり、記念号を予定しております。

会員の皆様の一層のご協力をお願いすると共にご健吟をお祈りします。

平成二十一年三月

編集委員 石野 喜次

佐藤 政夫

中路 良昭

生江沢広雄

(中路良昭 記)